
一念の弾丸

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一念の弾丸

【Nコード】

N1145I

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

娘が、殺人犯の人質にされた。警察官だった娘の父親は、助けるために威嚇で発砲する。だが、その行動が殺人犯の逆鱗に触れてしまい、娘が殺されてしまったのだ。怒った父親は殺人犯を殺そうと発砲するが、外れてしまい……。

「娘から手を放せっ！」

と、警察官が叫んだ。

その目の前には、凶悪な殺人犯が一人。

「近づくんじゃねーぞ、ポリ公がっ！ お前の娘がどうなっても良
いのかっ！」

「父さんっ！」

そして殺人犯の腕の中に、人質として警察官の娘が捕まっていた。

しかも、背後からナイフを突き立てられている。

これでは迂闊^{うかつ}に逮捕する事は出来ない。

無理をすれば、娘の命が危険になる。

だが、だからといって逃がす事も出来ない。

この殺人犯は、別件で五人も殺しているのだ。

もし取り逃がしでもしたら、もっと多くの人が殺されてしまうだろ
う。

殺人犯が威嚇^{いかく}するように吠えた。

「お前の娘が殺されなくなかったら、俺から離れるやつ！どかねえーと、また殺すぞっ！どーせ捕まったら、一生ムシヨ暮らしたんだからな」

へらへらと。

殺人犯は笑っていた。

その時。

銃声が響く。

空に向かって、警察官が威嚇発砲いかくはっぽうしたのだ。

だが、殺人犯は怯んではない。

いや、それどころか、怒りで目が赤黒く変色していた。

「ビビらせやがって、クソ警官がっ！本当に、娘の命がいらねえーっていうのかっ！」

発砲した警察官が、悲痛な顔に成る。

「娘を返せっ！私のたった一人の娘なんだ。放さないと、お前を殺すぞっ！」

「お父さん、助けてっ！」

人質になっている娘は涙を流し、体を小刻みに震わせていた。

「俺を殺す？ 面白い」

殺人犯は、にやりと笑い。

刺した。

背後から七センチほどの刃が、娘の心臓を一刺。

娘は、ナイフが体に突き刺さったまま、倒れ込んだ。

ぴくんぴくんと、陸に打ち上げられた魚のように体を痙攣させている。

そんな中。

警察官が、発砲した。

どうしても、許せなかったのだ。

娘を刺したというのに。

ヘラヘラと笑い続けている。

あの男の顔を、弾丸で打ち抜いてやりたかったのだ。

殺してやりたい、殺して、殺す。

警察官の顔が、般若のように歪む。

殺人犯に向かって、殺意と怨念の弾丸が飛び出す。

だが。

父親の執念も空しく。

弾丸は、何処かへ飛んで行ってしまったのだ。

怒りで手が震えるあまり、狙いがズレてしまったのだ。

「くそおっ！」

警察官が、もう一度、発砲しようと拳銃の引き金を引いた時。

そこに。

駆け付けた別の警察官に、殺人犯は逮捕されてしまったのだ。

「あははは、馬鹿な奴だ。娘が殺されたっていうのに、やり返す事も出来ないってうのかよ」

と、殺人犯はパトカーに乗せられるまで、へらへらと笑い続けた。

取り残されたのは。

冷たくなっていく娘の死体。

それに抱きつき、嗚咽おえつを漏もらす警察官。

現場を保持している人達だけだった。

撃たれた弾丸は飛び続け、近くの公園に落下した。

「マーマー、何か落ちているよ」

それを子供が拾い上げ、母親に見せた。

「そんな汚い物は拾わないで、ゴミ箱に捨てなさい」

「はい」

と、公衆のゴミ箱に入れられた。

その中味は、ゴミ収集車に持って行かれ、分別場に運ばれた。

人間の手によって、可燃、不燃、プラスチック、カンと瓶、発泡スチロールと分類される。

分けられた後は、個別に圧縮され、処理施設にトラックで運ばれる事となる。

その道中。

中国人の2人組に襲われ、一台のトラックが盗まれてしまったのだ。

そして。

トラックは中東に売られてしまい。

トラックに積みまれていた荷物は北海道を経由して、ロシアに流れ着いていた。

そこで荷物は溶かされ、固まりとなり。

加工され、輸入雑貨と装飾品が作られた。

出来上がった品は、直ぐに中国の義烏へ輸送されている。

義烏は世界でも有数の卸市場だ。

ありとあらゆる国の人間が訪れ、ありとあらゆる物が取り扱われている。

だが。

この後姿勢に、装飾品など全く売れなかった。

このままではゴミ市場に流されるといふ時。

ある日本の企業が装飾品を買い占めたのであった。

その日。

刑務所では、特別な料理が出されていた。

ステーキだ。

加工肉の安物だったが、脂気のない囚人達には御馳走だった。

一部屋、五名。

いそいそと全員が席に着き、号令してから食事が始まった。

ふと。

本来、会話は禁止されているのだが。

へらへらと、笑っている男が呟いた。

「なんか、小綺麗なナイフだな」

何時ものプラスチックのフォークやナイフではない。

装飾されている鉄か鉛製の食器に見えた。

「なんでも、百円ショップで大量に買ってきたらしいぜ」

と、誰かが答えた。

「ふーん、こんなもんに税金使うとはね」

へらへらと笑っていた男がステーキを食べた。

瞬間。

何故だが、尖端が口内に刺さってしまう。

「いちいち」

慌ててフォークを吐き出した時、置いてあったナイフに手が当たった。

その反動で飛んでしまったナイフが、サクッと眼球に突き刺さる。

「うぎゃあああああっ！」

あまりの痛さに、へらへらと笑っていた男が倒れ込む。

痛い、痛いと喚き。

百足の頭が釘を刺された時のように、ばたばたと足を動かし続けている。

その時、テーブルを蹴飛ばし、衝撃でひっくり返ってしまった。

だが、反対側に倒れる事はなく。

何故だか食卓の全ての物が、男にのし掛かってきたのだ。

「ひっ！」

男は息を飲んだ。

慌てて逃げようとするも、既に遅い。

いや、逃がさない、というようにとテーブルが倒れたのだった。

その後。

駆け付けてきた監視員が見たものは。

ハリネズミのように、10本のフォークとナイフが突き刺さっている男の死体であった。

普通ではあり得ない死に方だけに、監視員も不思議な事だと首を傾げていた。

それは、警察官の娘が殺された日から。

丁度、イチネン目の事故であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145i/>

一念の弾丸

2010年10月12日03時40分発行